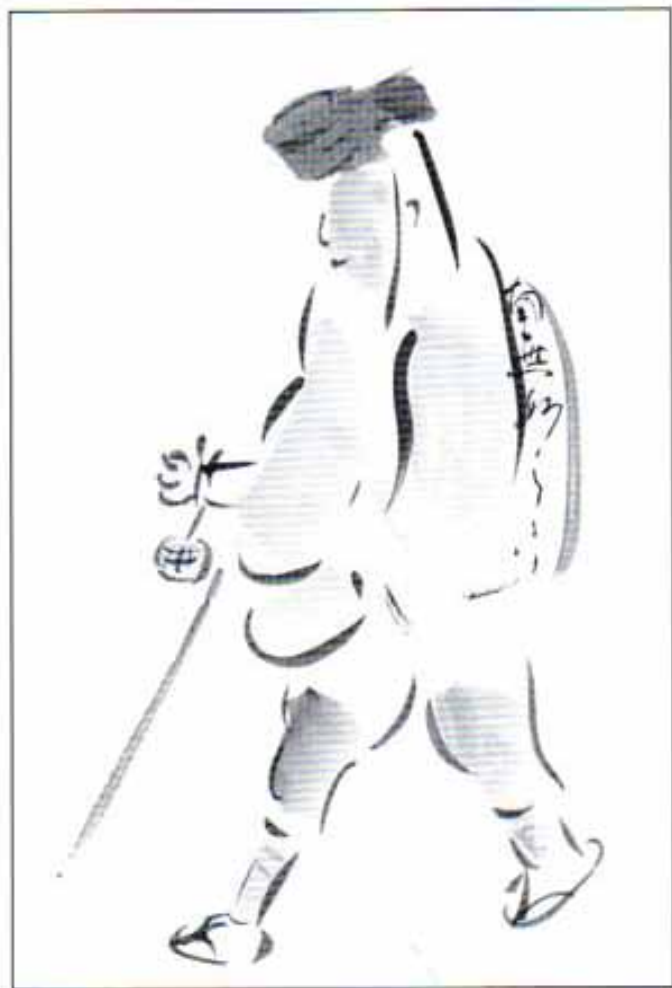


末黒野

すぐろの



4月号
(通巻920号)

初鵜

森清堯

崖下の潮の渦巻き石路の花
つつじ垣に熾火めきたり帰り花
くらがりの白山茶花の主張かな
建て替への小学校や冬木の芽
山巔の雲のうごかぬ冬至かな
やうやくの会議の果ての聖夜かな
数へ日や動くともなき雲富士に
曙の湾に綺羅満ち初景色
丘上の街の明るく初山河
やはらかき日差を背や筆始め
神苑の上風に乗り初鵜
自在なるドリブルの子や息白し

鰯起し

岡野里子

狛犬や突けば廻る初氷
水門の朽ちたる木肌雪婆
延べ段の先は朱の橋姫椿
飛石は歩幅に合はず散紅葉
手もて開くる列車の扉鰯起し
目地著き城の石垣冬すみれ
三千夫師忌ひとつ瞬く枯木星
末広の水脈の淑気や鏡池
餌台の雀のつがひ初景色
新春の福掃き寄せむ竹箒
老幹の淑気みちたり臥竜松
読始一日鬼平犯科帳

冬桜

黒滝志麻子
(顧問)

小春日や雲より淡く島浮かぶ
溪流の音を静めり冬茜
北風切つて帰船の漢仁王立ち
網元の出窓に洋酒冬灯
溜息のやうに咲き初む冬桜
寒風や素顔の美しき友来たる
秘めごとに友の耳打ち室の花
ひんやりと冬満月の競技場

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



福寿草

菅野日出子

裸木となりたる銀杏夜辺の風
福寿草小さく咲かせ違ひ棚
老いて知る家族の愛や年始
二日早や賀客に茶のみ病みをれば
鳥群れて一日に失せぬ実千両
骨折の痛みいつまで懐炉背に
供花にとてたまふ水仙香のほのか
この痛み書くもむなしき初日記
寺垣より元朝の日矢鳥めざめ
詩心を誘ふ机辺のシクラメン

年新た

森清信子

肌を刺す風雨の波止や冬ざるる
海へ向く溶岩の切岸冬落暉
沈みくる宿場の空や花八手
一斉に翔つ鴨池面剥ぐやうに
お湿りの今か今かと冬菜畑
船笛の澄む音いくつ年新た
海原を逸る炎や初日の出
仕来りを守るは難し五万米囃む
故郷の飾らぬ訛初電話
成人式先づは晴天言祝げり

一番機

石黒興兵

羽子板市の帰りとわかる包みかな
騒がしき豚舎ふところ山眠る
書に飽いて明るきうちの柚湯かな
一年の重さいや増し日記果つ
暁闇を灯し二人の初厨
明け初むる紅の富士初景色
七回目の我が干支の卯の初日かな
元朝のひかりとなりぬ一番機
産土に子の名の寄進初詣
三代の拍手揃ひ初詣

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



大晦日 大川暉美

友と歩を合はせる並木冬帽子
浜風やいよいよ細る干大根
母の香を纏ひ懐かしちやんちやんこ
恙無き来し方思ひ除日の湯
天へ地へ余韻の満ちて除夜の鐘
除夜の鐘眠らぬ町を流れけり
神籬の松一本の淑気かな

屠蘇祝ふ 今村千年

水鳥 太田良一

幸せをひとりひとりに冬至粥
ユトリロのコタンの小路空凍る
あらたまの年の鴉や神々し
老猫の嗶れ声の御慶かな
恙なき今を大事に屠蘇祝ふ
ちらほらと着物姿や初句会
犬も来て浜の消防出初式

御神木に触れぬ掟や冬の鶉
水鳥の寝入りを急かす暮色かな
寒色の分かつ潮目や冬の月
銭洗ふ水に初日の光かな
大物の釣るる初夢無人島
読初の卯年の神話白兎
一の矢の外さぬ的や弓始

篝 火 岡田史女

数へ日の一日は友の弔ひに
富士見ゆる丘や頻と笹子鳴く
晴れ渡る武蔵野台地冬の鵞
初日の出山河かがやき始めけり
天に星地に篝火や初景色
うしろ手に山を見てゐる二日かな
一月の海のけぶれり漁船

すずめ 小田嶋野笛

明星や枝を離れぬかじけ鳥
手に紅茶膝へ老猫冬日差
去年今年先師尊くなるばかり
お飾の稲へ群れ来る雀五羽
半畳の日向たまはり福寿草
いさかひもせずに初鳩初鳥
配達の牛乳瓶や氷点下

初御空 高木邦雄

去年今年船笛高き百千船
あらたまの水の惑星夢ほしき
白鳩の光となりぬ初御空
真つ新の注連の神杉淑気満つ
初明りの相輪眩し浅草寺
いかのぼり浜辺に響く児らの声
梅の香や風ほのかなる瑞泉寺

古 曆 長尾タイ

大噓あるじ一人の陶器市
水平線落暉の帯の冬の波
攫ふ波購ふ波やゆりかもめ
帽子編む会話の絡む毛糸玉
メモの数捨つるに惜しき古曆
今年より孫より受くるお年玉
七福神巡る一日の福の数

読 初 池乗恵美子

日記買ふ佳きことのみを記さんと
いつの世も吉良は悪人年暮るる
段葛冬至の落暉惜しみつつ
寒晴やクレインの首のよく動き
寒暁や彩雲かかる富士の肩
読初や実朝果てしところから
行き摩りの子等を御慶の朝かな



青炎集 森清堯選



横浜 新倉ゆき江

猫の手を借りることなし花八手
今日のことメモにとどめて忘年会
カピバラの気分となりぬ冬至風呂
エコロジーの袋の用意暮の市
行く年やキャリアバックの音急かし
格差無き三千世界初日の出

狭山 沼崎千枝

鳴立庵の古ぶる句碑や散紅葉
聖菓切る砂糖のサンタのみ残り
意地を捨てめくるカタログ節料理
初夢や鳥獣戯画の兎追ひ
タクシーへ師匠とんびを翻し
あの星の先のあたりね寒昂

横浜 六崎正善

冬ざれや水面に著き風の跡
憂きことはしばし忘れん日向ぼこ
やはらかき光遍し枯木道
一年を生きたるあかし賀状書く
兀兀の二文字綴る吉書かな
寒風や池面を走る水のきら

相模原 板谷俊武

県境の中州を覆ひ葦枯れて
眠られぬ闇を小突くや夫の咳
炬燵板返して牌のじやらじやらと
年の瀬や夕と勺の甍のレシピ
輪飾の一つ一つの祈りかな
初夢や詮無き事のリフレイン

葉山 伊藤美緒

極月や喧騒消ゆる地下画廊
笑顔見て皺は見ぬふり初鏡
初晴や沖の鳥居へ手を合はせ
吉と出てややもの足りず初神籤
幼子の賀客の膝を廻りをり
魚はぬる波打ち際や寒の入

横浜 渡辺富士子

足らぬ物は時間と御足十二月
跳ね上ぐる雨の雫や実千両
ゆるぎなき主婦の座五十年の暮
御世三代生きぬく八十路去年今年
着ぶくれの通勤電車シャボンの香
目覚しは電柱よりや寒鴉

横浜 小原紀子

銀行にシスター二人年の暮
寒晴や日差しにかざす針の耳
年寄りて一日の早し根深汁
歳時記を繰りて夜明けや膝毛布
冬夕焼高く舞ふ性鴉にも
まな板の乾く早さよ四温晴

横浜 岩上行雄

枯すすきの白き波立ち休耕田
湯浴みして旧知めく柚子首元へ
極月や干支にゆかりの虎魚画き
地下街の師走の人に溺れたり
棕櫚の葉のさざなみのやう冬至晴
破魔矢受く防大生の固き襟

横浜 竹内涼子

山茶花を散らし鳥糞つ日暮かな
鷺たちのシンクローのやう冬の川
行合ひの双子揃ひの冬帽子
枯芝にムスカリぽつと夕茜
若人満つ街の週末冬の月
ジェット機の音と鴉声や大晦日

三鷹 小林清彦

宗門の四の五の言はずクリスマス
恒例の存命通知賀状書く
出来ぬことまた一つ増え年移る
酒の粕なかなか溶けぬわだかまり
したたかに生きよとばかり冬桜
今朝の春気持ちに齡はとらせまじ

耕 土 集

岡野 里子 選



煤納窓の大空磨き上げ

横浜 丸山佐伎子

宮城 京極 久也

数へ日や視界の隅のカレンダー
句作りの心新たや初日の出
注連縄や青き香りを抱き帰る
揺るぎなき夢を貫く去年今年

箔押し of 絵本の並びクリスマス

文京 大曲ゆき枝

狭山 谷安喜美子

メモに無き物を買ひ足し年の市
道順は夫にまかせむ初詣
日だまりの形に群れて初雀
蒟蒻の手綱のゆるむ三日かな

クリスマス幸せさうな窓明り

横浜 森川 享

狭山 小林 友子

肥後どこさ東京に聞く手毬唄
釜鳴の音を汲み上ぐ初点前
雲一つ無き稜線や初日の出
林中の雪折の音獣道

柚子風呂や崖崖ばかりを見てゐる子
蜜相むく夫の卓には住所録
濠端を襷の走者初松籟
魚屋の貝売る声の四日かな
雪催シャッター降ろす古木屋

横浜 毛利 直子

賀状見て会ひたき人の多きかな

横浜 毛利 直子

横浜 鈴木千恵子

記すことの少し気取るや初日記
孫達にスマホを習ひ三が日
おみくじはいつも大吉初詣
マネキンの着るブラウスや買初に

訪ね来るサンタクロース二本杖
水仙や客を待つかに門の前
初日の出温もりもらひ合掌す
樗や亡夫に似たる子の姿
皆帰り一人となりぬ白障子

横浜 片岡登志枝

初なりの盆栽蜜柑三つほど
息吸つて夢の広がり初御空
すくやかに生きる悦び寒椿
ねむりたる街の音なし寒の月
碧空へ臘梅の黄の広がりぬ

マフラーを同時に畳み夫と目を
たかが菓子列長くして買ふ師走
裸木の水滴とどめ待つ明日
円卓の丸鶏を切る聖夜かな
晴天や夫の愚痴聞くお元日

横浜 白居 澄子

平らかなる大旦那り空真青
初鏡心まあるく暮したし
初春の玲瓏の富士仰ぎけり
迂闊にも切字をふたつ初句会
大寒の松の揺るるや日のひかり

にこにこと話し上手や着ぶくれて
行き先は日向と決めぬ冬の旅
ねんねこに通ふ親子の温みかな
数へ日や夕富士遠く見ゆるなり
おでん煮て一人楽しむ次の日も

横浜 杉山くみ子

風邪気味や甘きココアとビスケット
蚤の市の賑はふ広場冬うらら
裸木や夕日を背に仁王立ち
参道に並ぶ蕎麦屋や初詣
膝丈のジャージの生徒寒の雨

晴れ続き朝の照葉の眩しけれ
飛び立てるけたたましさや鴉の声
銀杏枯る坊主頭の子等に似て
放射状の太陽まぶし冬の朝
重たげに深紅の房や実万両

横浜 宮崎 浩美

秋の暮

池乗恵美子

初花の空あたらしき朝かな
 春光を集めて湖の広さかな
 春寄風やボトルメールの何処より
 貝寄風や緊りなき影遊ばせて
 踏青や緊りなみに暮れにけり
 野遊の影くれなゐに暮れにけり
 ひまはりや彼の地の空も青からん
 羅やひとつ捨てたる迷ひごと
 風立ちてよりの華やぎ初見草
 考妣の齢数へて敬老日
 憂きことは全て過去形小鳥来る
 人影の灯影へ急ぐ秋の暮
 枯木立の百の骨格百の影
 一年をかからりと丸め古暦
 鐘一年を打かからりと丸め古暦
 三代を繋ぐ暖簾や鳥総

木版刷

板谷俊武

玉浮子のびくりと沈み川の春
 三世代の通ひし校舎花の門
 一花また一花を積みて花水木
 種蒔や日付を標す油性ペン
 股立を取りて芥出すついでりか
 葛餅や木版刷の包み紙
 喉仏の上下にせはし生ビール
 虫ピンの展ぐる翅や夏の果
 木賊生ひ儀杖隊列捧げ銃
 地下足袋の絡む脚立や松手入
 秋寒や遅遅と進まぬ麵麩作り
 小春日や紐の解くるスニーカー
 牡蠣剥きの三手もて済む手練かな
 編み棒の打ち合ふ音の寒夜かな
 炉話や膝を崩して箸止めて

梅雨滂沱

小林清彦

ふきの臺未だ顔出す思ひ込み
 卒業子背にさよなら纏ひつ
 恨みごとと曖に outcomes 薪
 ここにゐることにはまぼろし
 引き際の静けき音や春の波
 鈍行の次も鈍行梅雨滂沱
 遠花火想ひ描くは過去ばかり
 音絶えて煌めく雫驟雨過ぎ
 願ひごと七夕竹に重過ぎ
 存在の価値語りかね藪枯ら
 ままならぬ送り火五山の雨
 十六夜や心残り多すぎ
 木の葉髪丸み増したる石頭
 紙コップ仕事納めたる事務
 Y軸に時間を置きて春を待つ

苔の川瀬

宮澤靖子

水面へと四つ手の雫白魚捕り
 春の土手図鑑代りのスマホ
 パン生地が発酵待つや春炬燵
 天気雨過ぎて玉解く芭蕉かな
 植糸終へたる棚田それぞれ空
 夏霧の湧き立つ苔の川瀬かな
 掛香の灰とたただよふ京の宿
 孵化場の鮭の慰霊碑晩夏光
 直売所西瓜へ直に値を記して
 名月や砂場に残る泥だんご
 ゴジラめく黒雲動く花野かな
 手際よき菊師仕上げと跡始末
 空つ風足場組む音吹き上り
 子は父の古ちゃんちやんこ飽かず
 じゃんけんや蜜柑の匂ふ手を出して

月涼し

六崎正善

朝日影谷の巖の落
 春暖の眩しき海や岬馬
 耕すや相模の海を望みつつ
 目に見えぬものくる憂さや杉の花
 宙に浮く光の一閃上り
 潜り戸の雨の雫や若
 夏雲や沖につぶての鳥の影
 万緑やべールのごとき雨の糸
 炎天の重たき影を背負ひけり
 月涼し松を頂く石か牛山
 たまに鳴くは沼の主か蛙
 雲上の分水嶺や鷹渡なる
 古本の書込み跡の秋思かな
 吹き上ぐる葉屑に紛れ秋の蝶
 処方薬の一つ増えたる寒さかな

耳を澄まして

五十嵐富士子

留守がちの別邸あとや車輪
 鶯の声に撓みて風の干りぬ
 柔らかなに絶えず潮風松葉
 ざわびの漁師ほそぼそ穴子船
 子安浜の漁師ほそぼそ穴子船
 河骨や池の片辺のしとたむろ
 船蔵より伸ぶるしとたむろ
 蚊遣香腰にゆるかし庭仕事
 薫風や海に真向かふ艇庫かな
 松籟と潮の香近き夏座敷
 蔵の窓赤き鉄鎖や夏の果て
 砂浜を染むる朝日や草紅葉
 校庭の銀杏の落葉を追ふ
 未枯の夏日の射す疎林
 朴落葉夏夏ふんすで夕日燦

海 月

伊藤美伽

渡船往く川の豊かや飛花落花
 天井を燕に貸して古市場
 馬の背滑る光風草千
 へプバーンの眉の強さや夏兆
 船頭の棹ゆつくりと河鹿
 一水の清みたる森や初
 万の椅子埋まるライプや夏の
 一生を透明にしてみよ
 新涼や森に玻璃組む美術館
 散るものに色付くものに秋
 秋声や舍利殿は背に山を置
 日を零し禅の庭木へ小鳥来
 急流の緩やかとなり野菊風
 魔女よりもピエロの怖し秋
 冬夕焼生家見知らぬ人の住
 み暮

赤とんぼ

大坂 正

寒鴉鳴き交せども相寄らず
 東の間の沼の輝き秋入日
 山茶花の散りて明るし背戸の
 丘陵の緩き稜線揚雲雀
 青麦やはや園児らの背丈ほ
 廃校の垣は連翹遠目にほ
 霊水のつのはる沢筋湖の鮎
 母残る故郷の駅カクナ咲
 一幕の劇見郷の駅カクナ咲
 酒盛りの劇見郷の駅カクナ咲
 大部屋を灯すひとり赤とんぼ
 己が肩へ寂しからんと赤とんぼ
 対岸のあおき切岸滝一
 策に干す梅の二日の軽さか
 画仙紙を走る渴筆文化の
 日

皮つるん

加藤タミ

薄紅のスカーフぎゆつと春寒し
 春一番大空泳ぐ縞のシヤツ
 ムスカリやエーゲ海より春の風
 しくじりも笑ひ話や花見酒
 何時までも待つと思ふな時計
 紫陽花の海と化したり窓の下
 隠しごとの二つ三つや夏の雲
 葎簧張を抜くる光やバーコード
 水蜜桃上手に熟れて皮つるん
 ピーマンや脳の海馬の摩訶不思議
 腕伝ひ汁の滴り浜の梨
 足まかせ鼻唄まかせ小春空
 山茶花の道の狭さよけんけん
 暇乞ひ逃すコーナーヒール早し
 バスを待つ時のゆるやか雪の降る

茶筥の泡

長谷川はまゆう

初場所や四股名呼ぶ声漲り
 ふんはりと茶筥の泡や春近き
 仲買ひの衣脱がせみ出す鱈かな
 春筍のケイ脱ブカ湯の発車音
 春空やケイ脱ブカ湯の発車音
 爪光る赤の袷紗や風炉点前
 宇治十帖閉ぢて新茶の薫りかな
 すれ違ふ球児の新茶の薫りかな
 子ら帰り居間の金魚の無言劇
 尺蠖の五体投地の僧に似て
 引く波や素足下砂の残して
 菊紋の盃に注がれて菊の酒
 競り市のや符帳の文字の暗がり
 冬至過ぎる写経の文の暗がり
 食べ尽くし語り尽くくして冬の月

考の手紙

平木三恵子

弾けたるポップコーンや花ミモザ
 捨て舟のたゆたふ水面春時雨
 歯むかふも成長の糧ひこばゆる
 黒板の桜と祝辞入学児
 玻璃皿の寄する白波落し鱧
 我はここ我はここよと飛ぶ蚩
 泣く女のピカソの絵画羽抜鶏
 モンローの白きドレスか夜開草
 足もとの影の長さや浜の秋
 紙焼けの考の手紙や秋深き
 髪飾り揺れて笑窪の七五三
 掃き寄するまた掃き寄する落葉か
 白鳥や背に嘴を眠らせ漁て
 沖着物姿雄々しく六日
 古画布に塗り込む白や六日

海辺の町

伊藤美緒

御料車を迎ふる町や梅日和
 春泥や森伐られたる造成一番
 江の島への波濤頻りや春桜
 御用邸の松の間のや初桜
 黒南風や呼び声強き朝の市
 花火果て一湾の闇戻りけり
 円き月丸き提灯浜踊りり
 突堤に釣人一人晩夏光り
 夜の秋や微かに一人晩夏光り
 台風の音を五つ沈めて秋夕
 鐘の音を五つ沈めて秋夕
 門閉ぢしままの別荘冬の蝶
 初凧や千貫松に富士寒の
 朱鷺色の夜明けの富士や寒の
 両陛下送る沿道日脚伸ぶ